活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

期　間：2019 年８月～１２月

学校名：大阪市立新巽中学校

本期間の取り組み内容

＜校内的な取り組みについて＞

１．チーム学び方改善

①単元テストの日程調整

２学期から単元テストの実施日を月の行事予定に組み込んだ。これによって、以下の３点に対して効果があった。

１）生徒の学習の見通しがついた

２）保護者へ実施日を明確に伝達できるようになった

３）教師も範囲や予定を調整しやすくなった

②学び直しの手段

再テストを実施する教科を試行した。再テスト用の問題はほぼ同一の内容を出題し、生徒たちのできない点をできるに変える手段として実施した。しかし、全ての教科が実施できたわけではない。そのため、本校の学び直しの手立てとして、以下の方法を実施した。

１）１学期同様、学期末に到達度確認テストを実施した。（範囲は１～２学期全般）

２）到達度確認テスト一週間前の部活動休止の期間に「フォロータイム」と称して、広範囲に渡る学習のサポートを行った。この際、タブレットドリルやｉプリといったデジタル教材を主として自習サポートも行った。

２．チーム PBL

①3 年生の取り組みについて

１）プロジェクトのテーマの設定と背景

43 期生は 3 年間 PBL を通して学習を進めてきた。文化発表会の発表を集大成として位置づけ、夏休み前から実行委員を募りプロジェクトを進めた。非認知スキルの育成や社会的な課題である自己肯定感の低さを克服させることを目的として PBL に取り組んできた。

PBL を行う際に、最も大切にするべきは子どもたちの衝動から発する学びへの思いをいかに生み出すかという点。これを抜きにしたテーマ設定や、PBL の実践には本質的な子どもの学びにつながらない。「なぜ“あなた”はその課題に取り組みたいのか」という子どもたち自身が持った衝動を出発点として、PBL を始める必要がある。そこで教師からの手立てとして夏休み明けより、実行委員のメンバーの内的な衝動を生み出す問いかけを投げ続けた。ここにかなり力を注いだ。その結果、今回の発表で彼らの伝えたい課題意識は、①これまでの自分たちの学びを 1.2 年生につなぐ②プロジェクトへの思いと意思を 1.2 年生につなぐ③学校を変えることで社会を変えるの 3 点であった。彼らはこれらをまとめ「つなぐプロジェクト～ちぇんじ the わぁるど～」というテーマを設定した。この 3 点を目的として彼ら自身が当日の発表を作り上げた。

２）働き方への提案

教師側の手立てとしてこだわったもう一つの点は、今後の社会での働き方を意識した PBL の実践で

ある。①自分のしたいこと・できることを通して仕事を作り、仲間を集めさせること。Keynote チーム・ムービーチーム・ものづくりチーム・アシスタントチーム・表現チーム等にグループが形成された。②その日々の取り組みを同じ一つの部屋・フロアで行うこと。この 2 点によって子どもたちは対話を通して、多くの衝突を乗り越えながら発表を作り上げていった。“自分のしたいこと”よりも”発表の目的“を考えるときに何を選択すべきかという問いをお互いに投げ掛け合う対話が至るところで見られた。ここでの子どもたちの葛藤の答えとして、目的を最上位に置いた選択を全員でしていった点には大きな学びがあった。

３）ICT 機器の活用

子どもたちからムービー作成や Keynote での発表がしたいという申し出があり、テクノロジーを活用した発表となった。ムービー作成に関しては、写真を使ったスライドショーや MV のような映像を作り上げていった。デジタルネイティブである彼らにとっては、テクノロジーの活用やタイピングの能力は必要なリテラシーとなる。そして、自分たちで作りたいという思いをもっての作成であるため、どうすればより良くなるかを彼ら自身で探究し作成していった。ICT の活用の“手段の目的化”は多く見られるが、このように PBL の目的の達成のための ICT の活用は非常の価値のあるものであった。

４）発表直前の大転換

文化発表会に近づくにつれて、発表はある程度形になっていった。しかし、発表直前に 2 年生と発表の方法がほぼ同じだということが発覚し、2 週間前に発表を考え直さなければならない状況になった。この問題に気づいた際、教員団ではこれを伝えるべきか否かを協議したが、子どもたちを信じて委ねる選択をした。その結果、子どもたちは 2 週間前にもかかわらず、発表を作り直す選択をした。そこで彼らは、発表を発表者からの一方向ではなく、観賞者を巻き込んだインタラクティブな発表へと転換させた。この選択をできたことこそが、目的を意識した選択を PBL を通して学んできた成果である。発表当日は、舞台上でのチャレンジを通して、鑑賞者が応援し共感しあい、ラストには体育館全体が総立ちとなり、1.2 年生のみならず保護者、教員まで全てを巻き込んだ発表となった。

②１・２年合同探究プロジェクト

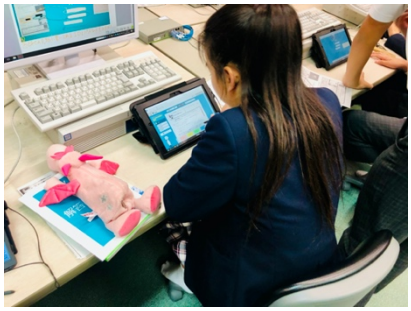
Glocal をテーマに、まずは自分たちができる身近なところから進めようという主旨の元、１２月から PBL 型学習の後半戦がスタートした。生野区をフィールドとして、生野区の「今」と「未来」を発信・提言するものである。生野区役所へ突撃訪問、街角インタビューといった取り組みを懇談期間という時間を有効活用し実施している。また、情報提供を２年が１年に行うなど、タテのつながりも自分たちでつなぎながら実践している。

活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

３．チームインフラ

①i プリの導入

２学期から i プリの導入を行った。生徒たちが「自ら選択する」活動の一手として、また、副教材をやめた学習教材の保証という２つの視点から実施している。テスト前の学習時間やフォロー的な学習、授業中での学習といった場面で活用している。放課後学習会に参加すれば、毎日、いつでも自分の必要がドリルを手に入れ、自分の課題に沿った学習教材を手にすることができるような環境を整えることができた。



②マークシート採点やアンケート業務

マークシートシステムが完成し、社会などの一問一答式のテストについてはマークシートで単元テストを実施することができた。単元テストの採点業務の緩和に一役買っている。また、生徒たちの資質・能力の育成の成果指標を図るためにアンケート評価を実施するが、そのような際に有効な手立てとすることができた。

４．校内研修・外部研修

①夏休み、ちょこっと研修会研修に関して

夏休み中に教員対象の ICT に関するちょこっと研修を実施した。目的は、教員の ICT スキルの向上。平時の授業期間には時間を取りにくく、ICT に関する研修を実施できていない現状があった。そのため、夏季休業中にちょこっとの時間で興味のある教員が集まり、学び合いを行った。内容は以下である。

②エクセル研修

エクセルでの業務が増えているが、基礎講座を実施した。成績算出で活用される場面が多いため、その際に活用の多い計算機能を学んだ。

③ワード研修

ワードは授業プリントから学級通信等、様々な場面で活用されている。その際のショートカットキーの解説や、文章の体裁を整える際のポイントを共有した。

④G Suite 研修（フォーム）

大阪市では、Google の個人 ID を使用した G Suite は活用できない。しかし、フォームであれば ID 無しにアンケートを集めることは可能なため、生徒用のタブレットでの活用を考え実施した。

＜校外的な発表、研修について＞

・Hero Makers 「未来の先生」へ至る EMBA 型共創プログラム(教師１名)（8/20～8/22）
・Apple 心斎橋 field trip 研修（10/4）
・第 45 回 全日本教育工学研究協議会 全国大会にて PBL 型実践の報告（10/18～10/19）
・第 66 回教育研究会大阪教育大学附属天王寺中学校高等学校へ参加（教師１名）(11/9)
・教育実践学フォーラム参加（教師１名）（11/10）

活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

・セサミストリートエデュケーションサミット in 大阪（教師３名）（11/10）
・公開授業・研究協議（11/22）（全教員）
・Ed camp NANIWA 参加（教師１名、生徒１名）（11/23）
・mini WAKZO pavilion 参加（11/24）
・教育実践学フォーラム参加（教師１名）（12/8）
・GEG Sakai にて実践報告（12/15）
・第一回大阪市教育フォーラムにて実践報告（12/26）
・Apple teacher 取得（教師２名）
・Google Certified Educator Level 1 取得（教師１名）

アドバイザーの助言と助言への対応

前回の訪問時に、「テストで問える力には限界がある」という指摘をいただき、校内で共有するための手段としてワークショップを行った。その際に学校内で「学力とは何か」について議論したところ、大きく３要素に分類できるのではないかという議論に至った。また、これらを図る上で効果的な評価方法もそれぞれあるということに至った。それは下記の３つである。

１）学んだ力（主に知識・技能）
　＊ペーパーテストで測ることができ、特に反復させると効果が高いもの
２）学びを活かす力（主に思考力・判断力）
　＊ペーパーテストだけでなくパフォーマンステストやルーブリック評価も効果あり
３）学びを活かそうとする力（主に主体性）
　＊リフレクションシート、観察、目標設定シート

文部科学省のいう学力の３要素と同等であるが、「これらを育てるためにテストという評価方法がどれだけ有効か？」という疑問に向き合うきっかけとなった。もちろん、学力を数値化し、知識量を測る行為も大切である。その良さを踏まえた上で、それだけで測ることのできない力の評価方法とはどのようなものがあるか、また、それをみとるにはどんな授業設計が良いのか？という課題に出会うことができた。それを元に 11 月の公開授業のテーマを「パフォーマンスを評価する授業設計とは？」と設定した。さらに、「単元テストと授業の関連性やペーパーテストとパフォーマンスの評価を公表できれば有意義ではないか？」というアドバイスもいただいた。いづれにしても形成的評価と総括的評価の区分けが学校全体で必要であることをご指摘いただいたと認識している。

本期間の裏話（うれしかったこと、苦心談など）

・PBL 型実践の後半戦がスタートし、１、２年生合同のプロジェクトを実施した。一般的には学年合同で実施することについては一定の不安もあるものだと推測するが、タテ持ち型実践をしている本校の強みだと感じた。
・VUCA の時代に突入し、過去の経験に依存するのではなく、柔軟に学び続ける人が価値を生み出し、また計画に時間をかけすぎることよりも、ある種の計画的な無計画の中でまず行動することが、価値を見出す時代へと変容している。そんな中、２年生は生野区をよりよくするための提言を行う上で、「生野区の課題とは何だろう？」という問いに直面した。そんな中、自分たちだけの憶測や少ない情報だけを頼りにプロジェクトを推進しても何の価値も生まないのではという疑問が生まれた。そこで、生徒たちは区役所へ足を運び、地域の相談窓口へ向かっていた。その中で職場体験でお世話になった縁もあり、まちづくり課の担当までつないでいただ

き、たくさんの情報を得ることができた。もちろん、同じ行政機関として連携を取ることが必須であるが、課題設定をする中で、生徒たちが主体的に情報を集めようとする姿はプロジェクト型学習の良さだと感じることができた。

・自主的に外部へ学びにいく教員が増えてきた。

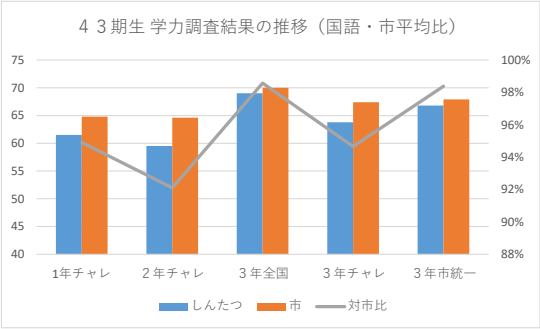
・生徒たちが知識伝達だけの学び方から脱却し、与えられるだけの学習から自ら学ぶ学習へと変容してきた。

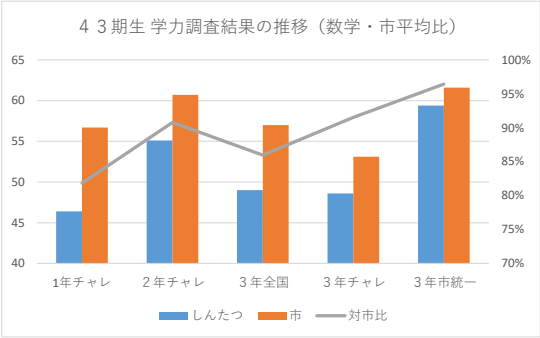
本期間の成果

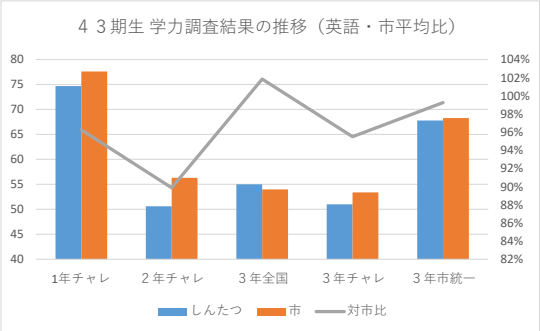
・本期間だけでとは言えないが、**学校の目的に沿った議論を重ねる中で無駄をなくし、教師１人で責任を負う仕組み**を根本から是正する取り組みを実践してきた成果として、下記のグラフの通り、学力の向上、それと自己効力感の向上が顕著に見られた。これは PBL 型授業を３年間実践した３年生のデータとなる。

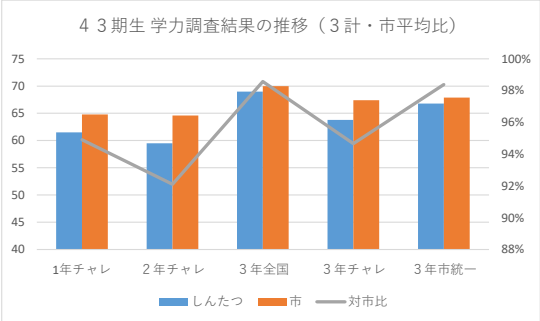
＊本校の取り組みの具体例

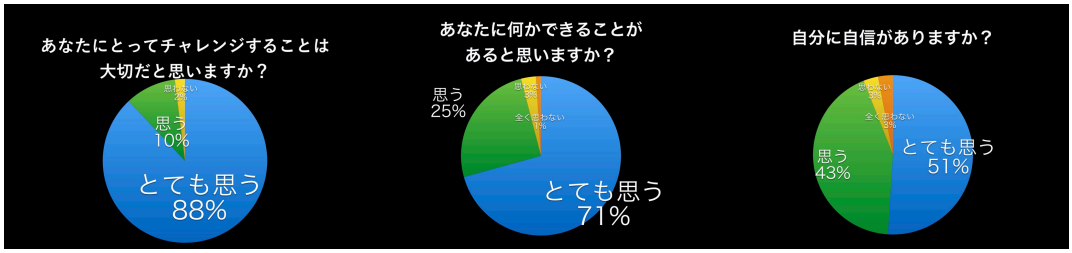
複数担任制、タテ持ち型編成、カリキュラムの是正、PBL 型実践、副教材の撤廃、単元テストの導入など











今後の課題

１）形成的評価と総括的評価の区分の明確化・校内での共有

２）非認知的スキルの可視化・エビデンス評価

３）学び直しの手立てとしての単元テストの効果的な評価方法のあり方

４）ファシリテーションスキル、ジェネレーター（伴走者）としてのスキルの向上

活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

今後の計画

・１、２年合同「地域活性化」プロジェクト（生野区の「今」と「未来」を照らせ！）（12～3 月）
・広東省東華初級中学との交流（２月６日）
・学習発表会（２月末）

気付き・学び（もしあれば記入）

「結局、評価って何？」この問いに対し、この５ヶ月向き合い続ける日々となったが、その中で評価と評定の目的について考えてみた。評価することの最上位の目的は**「現状を共有し、適切なタイミングに適切なフィードバックをすることで、学習者にこれからの学びへの見通しを持たせること」**と定義したとする。つまり、**「成長」に焦点を当てる**ということである。これに対し、評定の目的とは一体何なのであろう？例えばグルメサイト等でよく星の数を５段階で表し、平均値で評価している。これがいわゆる評定だと考えたとき、その評定を算出する人々の価値は様々で、味で評価をする人もいれば、接客で評価する人、店の雰囲気や食器、値段で評価する人もいるだろう。多様な価値基準や視点を総合して評定を算出しているのである。ひと目でわかるというメリットもあるが、店側からすると、「どんな視点を好評価してもらえたのか？」「どんな視点の改善が必要なのか」がわからなければ成長へのフィードバックとならない。これを教育に当てはめたとき、**「何を持ってその評定となったのか？」ということが学習者に伝わらなければ、成長に対して何の改善の手立てにもならない**ということである。学期末に評定を確認したところで、その数字から自身のどこに振り返る余地があるのかがわからないままであれば、評定を算出する側も、される側もただ数字が大きければ喜び、低ければ落胆するだけのものでしかないだろう。このような経緯から、**成果に価値付けする評定に求められるものと、成長に価値基準をおく評価とは、目的が全く異なるのでは**と捉えるようになった。そしてこの捉え方を混同してしまうが故に、生徒にとっての成長を優先すべき評価が、成果にのみ注視してしまい、**「誰の、何のための評価なのか」**に焦点が当たりづらい状況を生み出してしまうのではと考えるようになった。この疑問を取り組みの推進の中で明らかにし、「誰のための、何のための評価・評定なのか？」という問いの最適解を明確にしていきたい。

研究課題（申請書通りに記入）

アダプティブ・ラーニングを地盤とした２１世紀スキルと ESD 教育の推進
～全生徒を全教員で見守り、自己実現を可能にするＩＣＴとＡＩの効果的な活用～

成果目標（研究活動の進捗にしたがって、できるだけ具体的に記入）

・単元テストによって、生徒は学び直しの機会やできないところにより焦点をあてて学習をすることができる。
・単元テストによって教師は教科の評価方法を改善する仕組みとなる。
・生徒は自らの課題に応じて必要な学習の手立てを考え、選択するようになる。教師も課題を明らかにし、コーチングの視点の向上につながる。
・PBL 型学習の推進に伴い、生徒はもちろん、教師も探究的なストーリーを描きながら授業をつくる力が深まる。これにより、学校経営においても同様に、課題解決の視点をもった教員集団が形成される。
・生徒が望めば自主的に学ぶ仕組みを整えることで、与えられたことをこなす学習の習慣から、自ら考え、選択し、行動することができる自律した学習者へと変容する。
・取り組みによってどんな生徒を育成したいのかを明確にする。また評価の視点をつくり、学校全体で同様の方向性をもって学校運営を推進する。